

イエスの血によって、大胆に

NTTOB 福島 勲

「こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。」（ヘブル10章19節）

旧約時代の幕屋や神殿の場合は、至聖所に自由に入ることはできなかつた。大祭司でさえ、「かつてな時に垂れ幕の内側の聖所には行って…はならない。死ぬことのないためである」（レビ16:2）と警告されていました。

それが、新約では、〈兄弟たち。私たちは〉と呼ばれるすべてのキリスト者が、イエスの血によって、大胆に天の聖所に入ることができるのだ。

私はヘブル書を読み始めた頃、このヘブル10章19節の「大胆に」という言葉は不遜にも“誤訳”ではないかと思いました。キリスト者は罪の赦しにあずかり救われた者とはいえ、なお墮落した肉の性質を持っている。罪を犯すことが度々ある。このような罪深い私が「大胆にまことの聖所に入ることができる」と言い切れるのか。聖所に入るには、恐れおののき心低くし「この罪深い私をあわれんでください」と何度もお願いし、許しを頂いて初めて入れていただけののだと考えていたからです。「大胆に」などとはとんでもないと思っていました。

しかし、他の日本語訳聖書を比較して見ますと、

【口語訳】 兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかりことなく聖所にはいることができ、

【詳訳】 兄弟たちよ、こういうわけで、私たちはイエスの血にある〔力と効力によって〕少しもはばかりことなく〈確信をもって〉〔至〕聖所にはいることができ、

【新共同訳】 それで、兄弟たち、わたしたちは、イエスの血によって聖所に入れると確信しています。

とある。さらに代表的な英語訳とギリシャ語テキストも調べてみました。

【NKJV】 Therefore, brethren, having boldness to enter the Holiest by the blood of Jesus, （大胆さを持って至聖所にはいる）

【NLT】 And so, dear brothers and sisters, we can boldly enter heaven's Most Holy Place because of the blood of Jesus.

（大胆に天の至聖所に入ることができる）

「大胆に」と訳されているギリシャ語パレーシア（παρρησία）は、ギリシャ語小辞典（織田昭・大阪聖書学院）によれば、「言いたいことを自由に大胆に全部言えること、大胆な自由、人をはばからないこと、（相手に対して）大胆になれること、大胆になれる程の信頼、大胆に」等と解説されています。

ですから、「大胆に」という訳語に間違いはありません。間違っているのは私の先入観であり、この10章19節に至るまでの御言葉をよく理解せず、イエスの血に対して神がご覧になっておられるように私は見えていなかったのです。

自分の状態や感覚や経験で御言葉を解釈するべきではありません。神がご覧になり評価しておられるように、自分も同じく見て同じ評価をすること、それが正しい聖書理解であり信仰なのだ。

冒頭の「こういうわけですから」は何を受けているのでしょうか。少なくとも9章11節から10章18節までの説明文ではないでしょうか。

ここで、キリストは「やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられた」とあり、キリストの贖いのみわざの完全さ・完璧さが懇切丁寧に説明されています。

人類史上まさに未曾有の代価がイエス・キリストの血によって払われたことが明らかにされている。罪を贖う代価として一点の不足もない。

以上のことは、主イエスが贖いの死を遂げられた時の「神殿の幕は真っ二つに裂けた」（ルカ23:45）との出来事からも確認される。

仕切っていた幕が裂けたということは、人と至聖所を隔てる幕がもはや不要になったこと、もう神殿の役割は終わり、主イエスによって、だれでも神に近づくことができるようになったことを表している。

主イエスの十字架の死は、年に一度その幕を通して至聖所に入る大祭司の贖いを不要にし、もはや旧約時代の手数が掛かる面倒な方法によって神に近づく必要はなくなったのだ。なんと素晴らしいことであろう。

これらの説明の後に「こういうわけですから」が来る。このことがハッキリする時、大胆な確信が出て来る。

なお罪深い私も、自分の何かによっては一切なく、100パーセントただ「イエスの血によって」神の御前に問題のない者として受け入れられており、「大胆に、まことの聖所に入ることができる」と言い切れるのです。なんと感謝なことでしょう。ハレルヤ！と叫ばざるを得ません。